

第8回防火研修会概要報告

主題：「積雪のある寒冷地における高齢者・障害者施設（グループホームも含む）の夜間の火災安全確保について考える」

会場：社会福祉法人札幌緑花会 松泉学院地域交流スペース（松泉学院新館 3階）

日時：平成25年8月30日（金）14：00～17：00

主催：特定非営利活動法人 日本防火技術者協会（JAFPE）

共催 社会福祉法人札幌緑花会 松泉グループ

参加者：40名（施設関係者）

JAFPE：佐藤、大西、山村、岡田、栗岡

配布資料：研修会資料集、『「特別養護老人ホーム等で夜間に火災が発生した時どう行動すべきか」実践的な防火・避難マニュアルおよび同解説』（案）、『高齢者福祉施設を対象とした火災図上演習（FIG：Fire Image Game）による避難・防火のグループワーク訓練の解説』（案）、『「夜間に火災が発生した時どう行動すべきか」特別養護老人ホーム等の職員を対象とした訓練マニュアル』（案）

記録：山村、岡田、栗岡



1. はじめに

特定非営利活動法人日本防火技術者協会（以下、日本防火技術者協会と記す。）では、『積雪のある寒冷地における高齢者・障害者施設（グループホームも含む）の夜間の火災安全確保について考える』をメインテーマとした第8回防火研修会を、小樽市の社会福祉法人札幌緑花会松泉学院地域交流スペース（松泉学院新館3階）を会場に開催した。

開催にあたり社会福祉法人札幌緑花会松泉グループの共催を得て、高齢者および障害者施設等から合計40（参加者名簿あり）人の参加者を集めて盛況のうちに終了した。



2. 防火研修会の主旨

社会福祉施設などの夜間の火災で、複数の死傷者が発生する例が相変わらず続いています。このようなできごとが少しでも低減できればと考え、特定非営利活動法人日本防火技術者協会では、高齢者福祉施設などでの火災時避難安全性確保のための方策について検討するとともに、防火研修会や出前講座などさまざまな啓発活動を行ってきました。

今回、8月30日から北海道大学で開かれる日本建築学会大会において、私たちの研究成果を発表する機会があり、これにあわせて、北海道地区でも同様の施設職員向けの防火研修会を、札幌と小樽の2地区で開催することになりました。開催にあたっては、札幌市社会福祉協議会、小樽市松泉グループの共催をいただくことができました。今回の研修では私たちが首都圏において実施した防火研修会の内容を、積雪のある寒冷地にも対応できるように見直しました。

各施設の方々との質問・防火相談の時間も設けていますので、日頃から感じている疑問や不安なことをお寄せいただき、一緒に考えたいと思います。

3. 防火研修会プログラム

1) 主題：『積雪のある寒冷地における高齢者・障害者施設（グループホームも含む）の夜間の火災安全確保について考える』

司会：日本消防検定協会 技術参与 栗岡 均

2) 開会挨拶（14:00～14:13）：栗岡 均

・過去の防火研修会でのアンケート結果から、消防計画書や防火避難マニュアルを作成し、その内容を理解し問題がある場合は消防署にも相談をしているのにも拘らず、一般職員のみならず管理職員でさえも不安と感じていることが分かってきた。このことから、従来の消防計画や防火教育、訓練には検討の余地があるのではないかと考えている。

・火災時の安心安全な対応のためには、火災時の基本的な行動を予め決めておく、またその行動をできるように訓練しておくことが重要である。本日のテキスト後半に「防火避難」「FIG」「訓練」の、三つのマニュアル案を準備している。マニュアルでは火災時の基本的な行動をと職員の方に必要な防火の知識とはどんなものかも記載している。これらは皆さんの意見を頂き改良し、どんどん発信していきたい。施設に帰られた後、「物足りない」「現実にそぐわない」等の意見をFAXでいただきたい。

・本日は、建築・福祉の総合的な観点より対応できる実践的な教材やツールについて、その一端を報告する。一つ目の防火避難マニュアルについて佐藤講師より、FIGについて大西講師より説明と、実際の演習を行って頂く。

・予め配布したアンケートと、可能であれば各自の施設の平面図を帰るまでに受付に提出いただきたい。



3) 「北国の老人介護施設の実践的な夜間防火マニュアルの考え方」

(14:13~15:05) : 日本防火技術者協会福祉施設研究会代表 佐藤博臣

・2008年より高齢者の福祉施設の避難安全を保障するにはどうしたらよいか、という研究会を行っている。

・バルコニーを前提とした避難手法を検討してきたが、今年の1月に札幌の施設を見学させていただいたところ、積雪が激しいとバルコニーに出られないということが分かった。階段室等、一時避難場所についてマニュアルを見直しているところ。ただし、やらなければいけないこと自体はバルコニーや積雪に係らず変わらない。テキストにある三つのマニュアル案に準拠していけばよいと思う。



・ただしこれらのマニュアルは我々研究会のメンバーが頭で考えた部分が大きく、実際の施設の実状にそぐわないことも多々あると思われる。このようなギャップについて今後皆さんから意見をいただき、施設の実状に適したものに改良していきたいと考えている。

・施設の防火安全は入居者の状況や建物事態、備えられた設備とリンクする。事前の備えが大切。どこに気をつけて訓練や日ごろの備えをしていくかを観点に話をしたい。

・防火避難マニュアルは、福祉施設のように少ない職員数で多くの入居者の命を守るための基本戦術を示す。建物のどこか安全な場所に、入居者を「水平避難」させることが大事。その間に消防隊が到着するので、その階から屋外等への避難は消防の力を借りて行えばよい。消防到着前の段階で階段を用いた避難は、時間的にも困難だから行うべきでない、というのが当該マニュアルの大事なポイントである。

・図上訓練は、大西より詳しい説明があると思うが、要するにマニュアルを見たり教育を受けたりしても、それだけでは知識で終わってしまい、どう活用してよいか分からない。それを活用できるようにするために、皆さんの勤務されている施設の図面の上で、係員がいて、入居者がどのような状態かをイメージしながら、どういう戦略をとればこの施設にとっての火災被害を最小限にできるか、ということを考えるための訓練方法である。

・訓練マニュアルは、防火避難マニュアルと図上訓練を経て構築された個々の施設の戦術を、実際に体を動かして実施して、どんな問題があるか等を体で覚えるためのマニュアルである。また、それらの結果を総括して、施設が悪いのか、入居者に問題があるのか、単に訓練の不足なのかを判断できるような自己診断システムを現在検討中である。

・これらの三つのマニュアルの関係は、まず①防火避難マニュアルで基本的な戦術を学び、次に②FIGで個々の施設に適したより詳細な戦術を構築する、そして③構築した戦術を実際に訓練で体を動かして確かめて、上手くいかない部分がある場合は②から③を何回か繰り返す。何回繰り返してもダメなら戦術構築に立ち返り戦術を構築しなおす(方針が間違っているのか設備が足りないのか、建物の改修が必要なのか等の検証もあわせて行う)、というもの。

・高齢者の住まいは、住宅の延長で始まったものから病院のようなものまで、入居している方の自立度や医療の必要性等に応じて様々なものがある。本来はそれらの用途に合わせて適切な建物や設備の要件があるべき。さらに同じ用途でも建物や防災設備、人的条件が変われば火災時の安全のためのシナリオも変わってくる。それを、マニュアル等を活用して考え、実現でき

るようにしていただきたい。

- ・高齢者の10%以上が各種の施設で生活しているが、本来は残りの「自宅に住んでいる人たち」の火災安全も検討されるべき課題ではあるが、現状は福祉施設の職員の方々の火災への不安が非常に大きいことが、各種のアンケートから見て取れる。そのため、今回は「施設」の防火安全を検討する。
- ・建物規模、利用者のニーズ、階数等で法律は大まかに決まっている。そこに、実際、住んでいる入居者や職員、防火管理者、施設管理者の存在を、法律はあまり意識して作られていない。法律により、「火災を起こさない」、「火災を速く見つける」、「消火する」、「火災の拡大を抑えて避難を安全にできるようにする」等の目的で、様々な設備が施設に備え付けられている。しかしこれらの設備がただ付いているだけでなく、有効に使えるように、それぞれがどんな役割を持っているかを理解しておくことが大事である。
- ・防火・避難マニュアルで基本戦術として書いている中で、「火災室の扉を閉める」「廊下や共用部の排煙窓を開ける」「火災室以外の部屋や階段の扉を閉める」（煙拡散から避難のための時間を稼ぐ）は特に実施してほしいポイントである。
- ・通報は、電話で行うとやり取りに時間がかかるので、通報装置のボタンで行う。可能であれば自火報に連動して自動で消防署に通報が行くようにすることが望ましい。初期消火は、職員数が比較的多い昼間や、発見時、火が小さければ実施したほうが良いが、そうでないなら無理して行うべきでなく、出火室の入居者の救助が優先されるべきである。その後は、出火室の扉を閉め、廊下の排煙窓を開けることが重要である。
- ・一般的に排煙窓は天井に近い位置に設置されており、そこから煙を排出することで、煙層が下層に下りてくるまでの時間を稼ぐことができる。このような排煙窓の効果や使用方法について、消防は指導をしてくれないが、有効なものであることを知って欲しい。次に出火階の各室の扉を閉めることである。
- ・これらの行為により、避難のための時間を稼ぐことができる。この間に出火階の安全な場所に入居者らを避難させ、消防隊が来たら消防隊に任せる。それまでの安全な場所を用意しておく。RC造の場合、壁があつて扉がちゃんと閉まっていれば、10~20分くらいは持つ。さらに大きな施設ならSPがある。だから余裕を持って活動するとよい。ただし、避難時間でどのくらいを目標にしたらいいかというのは個別に定める必要がある。それは建物構造や設備、職員数等によって変わってくる。
- ・消防隊が来たら、どの部屋に何人いるかを報告する必要があるので、これも訓練の項目に入れて欲しい。
- ・防災設備機器の維持管理は、業者が点検に入ったときに確認するほうが良い。また可燃物の管理は重要である。同じ量の可燃物があつても、その管理状態によって燃え方は変わってくる。例えば衣類では、平積みとハンガー掛けではハンガーに掛けているほうが早く火煙が立ち上がり、火災が拡大しやすい。また同じ火源でも、室の中央部で発生するよりも室の四隅で発生したときの方が四倍ほど炎が高くなり、天井に早く到達する。建物自体や設備が十分でない場合はこれらの設備の維持管理と可燃物管理が重要になってくる。このあたりでは法律ではカバーできず、自主的な取り組みが必要である。
- ・バルコニーが積雪で使えないなら、屋内の出火階のどこかに安全な場所を設ける必要がある。

例えば、夜間は扉を閉めるという約束事を設け、避難時間を稼ぐために遮煙性能を有するスクリーンを後から備えることも一つの手段である。または階段付室を使うなら、そこに何人まで入ることが可能か調べておき、全員を付室に入れることが無理であれば残りの人はバルコニーに出す、または付室近辺の室に避難する等が、積雪地で実施せざるを得ない方法と思われる。

- ・「日常的な心構え」「頭を鍛える訓練」「行動を伴う訓練の実施」、これらが揃うことで、基本戦術に掲げた行動を確実に行うことができるようになる。
- ・「日常の準備」、「図上訓練」、「実訓練」、「実火災時」のどのステージでも重要なのは職員間の意思の疎通である。役割分担や出火階への参集を求めるときの連絡、また施設としての管理方針、火災時の対応方針などがある。特に出火階への参集については、各自の持ち場を離れるのが本当に良いのかということも事前に施設管理者も交えて話し合われるべきポイントである。
- ・訓練では目的と評価方法を決めておくことが必要で有る。例えば、目標避難時間に対して実際にはどのくらいの時間だったか、また問題点や改善点を含めて記録を残し、次回にフィードバックする等が挙げられる。
- ・実訓練や図上訓練ではリーダーを決める必要がある。リーダーは出火階の職員が務めると良いのではないかと（その階の入居者等の状況をよく分かっているため）。
- ・建築的、設備的な施設の弱点はどの施設にもあると思う。防火改修は必要だろうが、その施設にとって、何が優先される改修なのかを整理しておく必要がある。それを基に、消防行政に逆に「こういう順にさせて欲しい。」と提案できることが好ましい。

4) 「火災を想定した図上演習ゲーム (FIG) のすすめ方」

(15:20~16:20) : 神戸大学大学院 准教授 大西 一嘉

- ・「水平避難」は基本戦術として重要ではあるが、それでももし階避難をしなければならない状況になってしまったらどうすればよいか、二の矢、三の矢も考えておくことも大事だと思う (人の搬送方法についてのビデオ映像を紹介)。



- ・通常の避難訓練では消防等からシナリオを与えられることが多い。しかし「ここから出火したら困る」という場所は個々の施設で異なる。それは平常時に火気を用いる場所とも異なる。出火件数が高い場所と死者が発生し易い出火場所は必ずしも一致しない。例えば厨房は、火災は起きやすいが対策も考えられており、火災が拡大して死者が発生しやすい場所ではない。むしろ、予想もしていなかった場所から出火したときに被害が拡大しやすい (長崎「ベルハウス東山手」、福島「ROSE 倶楽部」の事例紹介)。出火場所をどこにするかということは一つのディスカッションのポイントになる。
- ・火災と対応行動のいろいろなシナリオが頭に入っていないと対応も硬直する。様々な状況に応用できるようになっておく必要がある。訓練も硬直化せずに頭を使って行う必要があるのではないかと。
- ・就寝施設における火災 100 件あたりの死者数は、病院 1.3、ホテル旅館は 1.2 に対して福祉施設は 4.3 と高い。時間帯で見ると夜間の火災が死者発生に繋がりやすい。この理由は、入居

者が就寝している，職員数が少なくまた入居者に目が届きにくい，更に過去には入居者が入眠剤を服用している事例もあった。

- ・一方で設備設置の効果を見ると，自火報設置により死者数低減に貢献するデータがある。
- ・日ごろの新聞等でも火災の原因や死者発生の要因に関心を持ってほしい。特に発火源，着火物，燃え広がりプロセスは，どれか一つを除外すると火災にはなり得ない。例えばタバコを発火源と想定した場合，喫煙を禁止することは一つの手段だが，それだけだと隠れタバコに対しては対策がない。着火物となる衣服やフトン，カーテンを防災製品や防災物品にしておくことで，もし隠れタバコをされたとしても燃え広がりにくい状況を作ることができる。こうした取り組みも結果的に施設の防火安全性を高めることに繋がる。
- ・これらの火災の死因で「焼死」と言われるが，実際は煙で亡くなる，避難に支障が出るという状況が非常に多い。それらを防ぐために，訓練時等で煙を防ぐ or 煙を排出する設備に触れて体験することは非常に重要。
- ・例えばこれから施設を始めようとする場合，天井が高いことや区画がしっかりしていること，壁や天井が燃えにくいこと等に気をつけると，火災安全性能を高めることが可能。
- ・図上訓練を行う上で重要になる時間は「避難開始時間」、「避難行動時間」、「避難余裕時間」、「避難限界時間」の四つ。避難行動時間までに屋外または屋内の安全な場所に避難しておくことが重要。避難限界時間は一般には5～8分くらい（木造なら5分を切る場合もある）。通常避難訓練で行っているのは避難行動時間の部分だけに過ぎない。避難開始時間を早めれば，避難余裕時間が生まれる。避難余裕時間が長いほど安全性は高い。よって，ベルが鳴ったらすぐ避難することが大切で，この部分も訓練を行う必要がある。
- ・図上訓練では施設内の平面図だけでなく周囲の地図もあわせて用いると良い。出火点をどこに置いたら避難の動きの妨げになるのか，出火リスクが少なくても煙による避難の危険性が高いところはどこか，出火点をいろいろ変えてみて皆で考える。
- ・グループワークでは進行役や記録係，入居者役や現場職員役を決めて行う。その他，出火点や消火器等の設備もマグネット等を用いて図面上においていく。正規の職員だけでなく，パートの人や入居者も参加できる人には参加してもらおう。いろんな人が，自分が当事者になったことを想定して，様々なシナリオを考えておくことは大切だと思う。最後にどんな想定をしてどんな結果になったかを報告し合う。避難限界時間が5～8分程度なので，グループワークも長くても10分程度。
- ・進行役は防火管理者が務めると良い。防火管理者は，講習等に行ったときにただ聴講するだけでなく，「こんな場合はどう考えたらよいか」を講師に質問できることが好ましい。「このときはこうしなさい」という単一的な答えは存在せず，個々の施設の特性に適した答えがあるはず。例えばバルコニー避難を取ってみても，確率的にはバルコニーに避難するほうが助かる可能性は高いが，プランの特徴や火災の状況，外の天候によっては必ずしもそうとは言い切れない場合もある。最後は現場にいる方が判断するしかない。その判断のためのヒントを講習会等で身に着けて，上記の進行役等でフィードバックしてほしい。
- ・記録係は，それぞれのグループワークで抽出された問題点等をちゃんと記録する。
- ・図上訓練では，より悪いシナリオを予測できたかどうか，施設の弱点を見つけたかどうかを競う。成功体験よりも失敗体験から得られることのほうが多い。事例を挙げると，粉末消火器

の場合で、放射により視界が真っ白になり火元が分からなくなって、火元に有効に消火薬剤を到達させることができなくなるということがあった。消防に聞けばこのような失敗事例を教えてください。

・図上訓練ではいろいろなことを想像してほしい。出火点ならば、屋内だけでなく隣棟からの類焼の方が危険なこともある。隣棟からの類焼の場合、施設内の自火報は作動せず、突然、窓ガラスが割れて火煙が施設内に流入してきて火災に気付くことになる。また放火されることを前提に考えるとどうなるのか？個室の入居者を救出するとき、廊下が使えずバルコニー側から個室に侵入するとき、窓が施錠されていたらどうやって窓ガラスを割るのか？また全員を救出できても、その日以降どのように生活していくのか？等々も想像して欲しい項目である。

4. 質疑応答 (16:20～16:55)

1) 火元確認と避難

質問A：私の施設では、月1回、夜間火災発生想定 of 訓練を行っている。いつもの形だと、一階職員が一階の自火報盤で出火階を確認し、出火階の職員に火災の有無を確認するよう連絡することから訓練を開始する。実火災なら、このとき既にベルは鳴っていると思われるが、ベルが鳴った時点で火元の確認はせずに避難した方が良いのか？

大西：自力で避難できるとか入眠剤を使用しているとか、また建物構造等で、どれだけ避難余裕時間があるかによると思う。基本は早く避難することであるが、2人の職員がいるなら、一方が火元を確認し、もう一方が避難を開始する。通報は自動火災通報設備にしておくことが好ましい。



火元の確認も、それだけでなく出火室の扉を閉めることで避難時間を稼ぐことに繋がるので、放たらかしにはすべきでない。ただし、例えば火災を発見したときに必要以上に消火に固執すると、安全な避難のための時間も浪費してしまうことに繋がる。適切な判断をその場その場で冷静に見切りをつけて下していくことが大切である。

栗岡：訓練では出火階の避難はどこまで移動することを考えているのか？

回答) 普段使用している階段が防火扉の構造になっているので、防火扉の外まで移動すること(階段室内への避難)としている。施設は3フロアあり、入居者は各フロアとも9名で、車イスが各フロアで3名、残りは自力歩行が可能。夜間の職員数は各フロア1名ずつである。

栗岡：2、3階の利用者を助ける際、階段室空間を利用するの避難は難しいのでは？

回答) 消防隊の救助を待たざるを得ないが、バルコニーには9人が避難できるスペースがない。

栗岡：各階の一時避難場所になり得るところは階段付室だけですか？

回答) 階段とは反対側に位置するバルコニーがあるが、車椅子二台分くらいのスペースしかない(全周バルコニーではないと思われる)。自立した人間なら4～5人は入れる。

大西：階段近くで出火し、かつ覚知が遅れた場合にどうなるかを考える必要がある。防火扉の外

側まで行ければよいが、一人々誘導すると時間もかかるので、上手くいかないときにどうするか。バルコニーには全員出られないなら、最悪どこかの部屋に閉じこもることも考えなければいけない。

回答) 現状、出火してから全員の避難が完了するまで、4~7分。車イスが多いと7分かかる。

栗岡：消防に話を聞いたところ、階段室やバルコニーのような侵入口から近い位置に集まってくられるほうが救助しやすいとのこと。全員がそれぞれの個室にいるようだと救助しにくいですが、救助しやすい位置に全員確実にいるなら、必ず助けに行くとのことだった。

大西：万が一階段室やバルコニーに避難する時間がなかった場合、閉じこもるとすれば道路側の個室に集まっているほうが、消防も梯子車等で救助しやすいと思われる。消防に居場所を知らせるために声を上げる、旗を振る等も必要になる。

2) 出火階に職員が参集するシナリオについて

佐藤：火災時、火災階に助けに行くことを推奨するが、担当のフロアの面倒も見なければならぬことが問題である。また、火災フロアの入居者の状況把握や、火災時の情報共有の必要がある。火災が起こったら、火元から離れたところに集まり、低い姿勢になる。ドアの隙間などは濡れタオルを挟む等の工夫も必要で有る。

大西：夜間複数の職員がいる場合で、出火時、各自の持ち場を離れて出火階に参集するシナリオを考えている施設はあるか？(挙手で確認)

回答) 3~4 施設が挙手

佐藤：9名の入居者を一人の職員が避難させるよりは、三人の職員(3階分)で避難させるほうが安全性が高い。我々の研究会の意見としては参集することを推奨する。ただし、各階の入居者がパニックになると困る場合もあるかもしれない。

3) 避難誘導の優先順位

大西：火災が起こったら、車椅子を必要とする等避難誘導に手のかかる入居者と、手のかからない入居者のどちらを優先して避難誘導すべきか？(挙手で確認)

回答) 手のかからない入居者を優先すると回答した参加者が6~7割程度多かった

回答者①：命に関わる優先順位を考えた。

回答者②：声をかけて逃げれる人を逃がした方がいいと考えた。

「手がかかる入居者」と回答した参加者の意見：声を掛ければ避難できる人には声掛けのみでよい、職員が見るべきは手がかかる人だと思う。

大西：そのためには大声を出す訓練も必要である。普段、大声を出さない人が火事するときだけ大声を出すことは中々難しいものである。

4) 声掛けしても目を覚まさない入居者への対応

大西：入眠剤を服用するなどして、いくら起こしても起きない入居者がいた時に、起きるまで頑張るか？次に行くか？(挙手で確認)

回答) かなり意見が分かれた。

(「その場にとどまる」と回答した参加者の意見)：最終的には、足が折れてでも多少手荒くても

無理やり外に引っ張り出すくらいのことをしてよいと思う。

(「次に行く」と回答した参加者の意見)：3分経ったら自分も焦っていると思う。何がなんだかわからなくなって、次に行きそう。舞い上がることが予想される。

大西：舞い上がってしまい、どっちがどっちか分からなくなると思う。そういう場面に自分が遭遇することを考えておくと、より適切な行動を取れる可能性が高くなる。図上訓練での自分の判断を客観視することができる。図上訓練ではそういう状況を想定して自分ならどうするかを皆で議論して欲しい。議論の中におそらく別の答えはなく、結局は「次へ行くか」「その場にとどまるか」のどちらかしかないが、次へ行くことのリスク、その場にとどまったときの打開の手順を話し合う。そうすることで、いざというときに少しは冷静に素早く判断できるようになると思う。

栗岡：施設の内部事情に詳しい施設職員が自ら考えることが重要である。消防からの一般的な解決法に満足せずに、今回の講義のように自施設の火災時の戦略については FIG を利用して実証していけば良い。

5) その他

大西：避難場所としてはどんな場所を考えているか？

回答)「火元から遠い場所」等の回答があった。

大西：洗濯物をどうやって干しているか？

回答)「冬は乾燥するので、乾燥機は使わない。室内干しすることが多い。」という意見が挙げられた。

大西：ストーブの直上に洗濯物を置いて干すことはあるか？

回答) ストーブを使っているが、フロアの真ん中に置いている。入居者が濡れたタオルを上にかける場合がある。それは寝る前にチェックしている。

共用部では行っていないが、入居者が個室でストーブ上で干していた事例が実際にあり、対策を話し合ったことはあった。

光増施設長：北国の生活習慣として、ストーブ近くに干す傾向がある。

大西：防災や防火は、日常の生活の中でどれだけ意識できるかが重要。知識も必要だが、その前にまず関心を持つこと。関心を持つことの一つの手段に図上訓練も含まれる。関心を持ち、図上訓練等により積極的に係るようにしていただきたい。

5. 閉会挨拶 (16:55~17:00)：社会福祉法人札幌緑花会 光増昌久理事

障害者向けの施設を20ほど運営しているが、障害者施設は高齢者に比べても課題が多い。その中には建築基準法や消防法も含まれる。特に防火対象物6項(ロ)において、障害の重い方が施設の8割いる場合は面積に関係なくスプリンクラー設置のという議論も始まっており、困っているというのが正直なところである。

一方、スプリンクラー等の設備を設置すれば万全という訳でもない。自分が見ている人たちの中には、昼間は元気でも夜は向精神薬や入眠剤を飲んでいて非常にベルが鳴っても起きない人が多い。そういう人たちをどう避難させるか



ということが、本日の多くの参加者に共通する悩みではないかと思う。

障害者施設と高齢者施設と一緒に勉強する機会はこれまであまり多くなかったが、今後は増やしていきたいので、また声を掛けさせていただきたい。

今年から日本グループホーム学会の代表になった。時間があればHPを見ていただきたい。厚生労働省から助成金をもらってグループホームの実態調査をしたり、消防法や建築基準法に意見を出したり、マニュアルを作って全国の消防署に配ったり等の活動成果物の9割はHPで公開している。消防関係者も閲覧されているようなので、皆さんにも活用していただきたい。

謝辞

研究会に所属している会員のいない場所での研修会を開催するための準備・進行に関しては、今回、社会福祉法人札幌緑花会松泉グループの全面的な協力の下、無事終了しました。関係者の支援に感謝の意を表します。

